

Title	日本語学習者の接触場面におけるターン交替時の発話の語用論的特徴
Author(s)	磯野, 英治; 上仲, 淳
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 18 P.31-P.39
Issue Date	2014-3-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/50829">http://hdl.handle.net/11094/50829</a>
DOI	
Rights	

**Osaka University Knowledge Archive : OUKA**

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

## 日本語学習者の接触場面におけるターン交替時の発話の語用論的特徴

磯野英治\*・上仲淳†

### 要 旨

本研究では、条件統制を行った日本語学習者の接触場面の会話を、ターン交替に注目して定量的な分析を行った上で、ターン交替時の発話から各項目の語用論的機能の多様性を明らかにした。また日本語母語話者の会話との比較により、日本語学習者がいかにターン交替し、会話を展開させているのかを記述することによって日本語母語話者、及び日本語学習者の会話の多様性に迫った。調査の結果、不自然さや誤用といった側面だけではなく、日本語母語話者の会話にはあまり見られないが、日本語学習者の会話には多く見られ、かつ自然なターン交替が成り立っているという事例も確認できた。本研究では日本語母語話者の会話のみがモデルとなる訳ではないこと、そして日本語学習者の会話の語用論的と言える発話を分析することで、言語的な多様性をさらに明らかにできる可能性があることに言及した。

【キーワード】 接触場面とターン交替、ターン交替直後の発話の定量的分析、日本語母語話者と日本語学習者のターン交替、日本語学習者の発話の語用論的特徴と機能

### 1 はじめに

日本語教育において、特に初級を終えたレベル以上の会話教育の中心課題が、文法能力の習得から運用能力の習得へとといった認識が広がりを見せ始めて久しい。運用能力とは、基礎的な文法知識を活用しつつ、実際の文脈に即した適切で円滑なコミュニケーションを行うための語用論的な知識と技術のことであり、会話は文法や語彙の正確性のほか、場に合った適切さや自然さといった複合的な要素が絡んで成立している。日本語学習者はそのレベルが上がるにつれ、この運用能力の獲得に移行していくことになるが、実際の会話のやりとりは複雑であり、特に初級以上の日本語教育ではこのような内容をいかに取り入れていくのが重要な鍵となる。これまでに創作会話と自然会話の比較研究や日本語の語用論的な特徴の基礎的分析、会話教材の試作等の成果が報告されており(才田 2003、宇佐美 2007)、フィラーやあいづちといった自然な会話ならではの各項目を「日本語教育のためのという『視点』で捉えなおす必要性」(宇佐美 2012)も論じられている。このよ

うな現状の中、磯野(2009、2010a,b、2011a,b,c、2013)では、ターン交替時の発話に注目し、直前の発話との対照から各項目とその機能をまとめたかたちで探る定量的分析の必要性を指摘した。そして、日本語母語話者間の会話におけるディスコースマーカー、指示・言及、あいづち、返答、繰り返し、言い換え、疑問、先取り、直接発話といったターン交替時の発話の定量的な分析を行い、その機能の語用論的な多様性を明らかにした<sup>1</sup>。本研究はこの一連の研究を拡大させ、条件統制を行った日本語学習者の接触場面の会話を同様の方法で定量的な分析をした上で、ターン交替時の発話から各項目の語用論的特徴の多様性に言及しようというものである。また母語話者間の会話との比較により、日本語学習者がいかにターン交替し、会話を展開させているのかを記述することによって日本語母語話者、及び日本語学習者の会話の多様性に迫り、異文化理解や多言語・多文化社会における日本語コミュニケーションの位置づけを図るための基礎的研究として貢献する狙い

\* 大阪大学国際教育交流センター 准教授(特任)

† 大阪大学国際教育交流センター 非常勤講師

がある。言うまでもなく日本語母語話者の会話が「モデル」となり、日本語学習者との比較を行うものではない。

## 2 先行研究

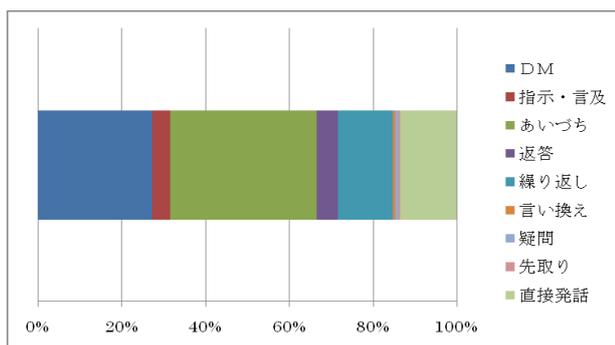
既述のように磯野 (2009、2010a,b、2011a,b,c、2013) では、日本語母語話者間の会話についてターン交替時の発話の各項目 (形式的分類) の出現率とその機能の多様性について分析を行った。まず日本語母語話者のデータは、語用論的機能を分析することから、男女の比率や年代、方言といった周辺的な要素に配慮し以下のような条件統制を行った。

表1：日本語母語話者データの概要

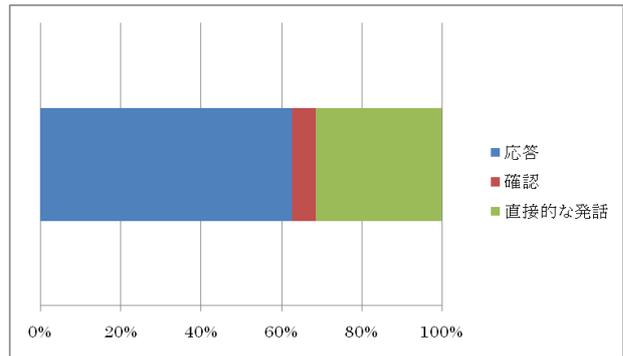
グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語母語場面	インタビュアー 30代  学生 (被験者) 20代	東京 (共通語)	インタビュアー (IN) 1名 (女性) × 日本語母語話者 (M01-12 F01-12) 男女各12名	24 会話

分析の観点は、以下のグラフ1、2と会話例 (1) から (3) に示したように、インタビュアー (IN) から日本語母語話者 (M04) にターンが交替した直後の発話がどのような形式 (形式的分類) で始まっているのか、そしてその表現形式 (例えば以下の「そうですね」) が会話の文脈の中でどのような機能を有しているのか (機能的分類) であり、形式的分類と機能的分類のそれぞれを定量的に分析した上でその傾向を探り、さらに対応関係を調査することでその機能の多様性に迫ろうとするものであった。

グラフ1：ターン交替時の発話の構成要素 (形式的分類：上位)



グラフ2：ターン交替時の発話の構成要素 (機能的分類：上位)



(1) 形式的分類：上位分類 あいづち 下位分類 そう系

機能的分類：上位分類 応答 下位分類 聞いている

IN	じゃあですねー、お休みの日があったら何をすることが多いですか？。
M04	<u>そうですね</u> 最近によく麻雀やってます<笑い>。

(2) 形式的分類：上位分類 あいづち 下位分類 そう系

機能的分類：上位分類 応答 下位分類 理解している

M04	それは、あー、なんかハワイのホノルルマラソンに(はい)、1回出てみたいなくて思います、はい>{<}。
IN	<へー>{<}、あれはかなり長距離になりますけど。
M04	<u>そうですね</u> (うーん)、なんか、あたしの友達が(はい)、行ったことがあるって(ふーん)、なんかその友達の話を聞いてたら、すごい楽しそうで(うーん)、1回、一生のうちに1回は<行ってみたいとか>{<}。

(3) 形式的分類：上位分類 あいづち 下位分類 そう系

機能的分類：上位分類 応答 下位分類 同意

IN	普段から、よく話とかしたりする？。
M04	<u>そうですね</u> 、やっぱりまた部活の人に<笑い>(はい)、部活の子に(はい)、タイの方がいらっしやいまして。

以上からは、日本語母語話者間の会話では、あいづちやディスコースマーカ―の形式でターン交替時の会話を展開することが多く、その機能の多くは応答であること、そして定性的分析によって「そうですね」のように同じ表現形式でターンを開始していても、前後の会話内容と文脈からその相対的機能が異なることが明らかになった。本研究では日本語母語話者間の会話の分析を参考に、同じような目的と条件統制を行った日本語学習者の接触場面データ

を、同様の定義に基づく方法論で定量的に分析を行うが、日本語母語話者との違いを明らかにすることのみならず、表現と機能の多様性を異文化理解や多言語社会における日本語の位置づけとともに論じ、さらには日本語母語話者に意識されていない点についても言及したい。

### 3 調査概要

分析対象となるデータは日本語母語話者データと同じく、一般に公開されるコーパスであることを関係者が同意した外国人日本語学習者の接触場面の日本語会話データである<sup>2</sup>。インタビューという特性上、外国人日本語学習者の日本語レベルは中級から上級で、プロの日本人インタビュアー1名に対して外国人日本語学習者の男女比（男女各10名）、被験者の年齢はインタビュアーよりも年下、初対面といった条件統制も日本語母語話者データと同様にしてある<sup>3</sup>。またインタビューは簡単な自己紹介（名前や日本に来て何年目か、現在は何をしているかなど）から始まり、「食生活」をテーマに行い、複数の質問項目に対してその内容から大きく逸脱しない限り、自由に進行できることとした。また、あいづちなどの聞き手の反応、確認や追加の質問、発展的な話題はインタビュアーの技術に任せ、できるだけ自然な会話が収集できるような方法（西郡2002、磯野2007）を採用した<sup>4</sup>。文字化はターン交替時の発話を分析対象とするため宇佐美（2007）のBTSJ（Basic Transcription System for Japanese）で行い、音声的特徴やターン交替の認定の観点から3次文字化（ピアチェック）まで行っている。以下に会話データの概要と被験者の属性を示す。

表2：外国人日本語学習者データの概要

グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語接触場面	インタビュアー30代  学生社会人(被験者)10-30代	東京(共通語)	インタビュアー(1N)1名(女性) × 外国人日本語学習者男女各10名	20 会話

表3：被験者の背景情報

被験者	性別	年齢	国籍	判定レベル	滞日期間	学習時間	能力試験
1.KRMA	男	29	韓国	上級	2年2ヶ月	日本語学校1年半(上級クラス)修了	1級
2.KRFA	女	20	韓国	上級	11ヶ月	日本語学校上級クラス在籍+高校で480時間	
3.KRMI	男	25	韓国	中級	11ヶ月	日本語学校中級クラス在籍	
4.KRFI	女	26	韓国	中級	6ヶ月	日本語学校中級クラス在籍+韓国の専門校で320時間	2級
5.CHMA	男	24	中国	上級	1年8ヶ月	日本語学校1年半(上級クラス)修了	1級
6.CHFA	女	30	中国	上級	5年2ヶ月	日本語学校2年修了+日本の大学卒業	1級
7.CHMI	男	26	中国	中級	1年8ヶ月	180時間(中国の語学学校)	2級
8.CHFI	女	25	中国	中級	2年	日本語学校1年修了+大学授業90時間	2級
9.INMA	男	20	インドネシア	上級	1年2ヶ月	本国国際交流基金で1年修了+大学授業90時間	
10.INFA	女	24	インドネシア	上級	4年2ヶ月	日本語学校1年修了+大学等での学習200時間+5ヶ月日本に交換留学	1級
11.INMI	男	18	インドネシア	中級	8ヶ月	日本語学校204時間+大学授業72時間	3級
12.INFI	女	29	インドネシア	中級	2年1ヶ月	日本語学校中級クラス在籍+ユニスコ140時間	2級
13.THMA	男	20	タイ	上級	2年2ヶ月	日本語学校1年修了+大学授業90時間	1級
14.THFA	女	30	タイ	上級	2年2ヶ月	大学別科576時間+大学授業1200時間	1級
15.THMI	男	21	タイ	中級	9ヶ月	日本語学校中級クラス在籍+その他約240時間	
16.THFI	女	19	タイ	中級	9ヶ月	日本語学校中級クラス在籍	
17.EGMA	男	27	カナダ	上級	3年3ヶ月	日本語学校上級クラス在籍+他に約240時間	2級

18EGFA	女	24	イギリス	上級	11ヶ月	日本語学校 上級クラス 在籍+本国 で約 100 時間	
19EGMI	男	37	アメリカ	中級	10ヶ月	日本語学校 中級クラス 在籍+本国 で約 200 時間	3級
20EGFI	女	24	イギリス	中級	8ヶ月	日本語学校 中級クラス 在籍	

被験者欄ではじめの2文字は母語を (KR:韓国語、CH:北京語、IN:インドネシア語、TH:タイ語、EG:英語)、3文字目は性別を (Male・Female)、4文字目は日本語レベル (intermediate・advanced) を表す。また能力試験の欄は取得済みの資格を示しており、表は西郡・崔・磯野 (2010) による。本研究では、まず外国人日本語学習者の日本語会話において、ターン交替時の発話の形式的分類に関して定量的な分析を行い、日本語母語話者との比較からその傾向を明らかにするとともに、日本語非母語話者の会話の語用論的な特徴に言及する。

#### 4 分析と考察

分析に際して本研究では、二つの統計的な処理を行っている。ターン交替時の発話を形式的に分類する際に、その形式的分類が客観的な指標として問題がないかという信頼性を確保するための Cohen's Kappa (Bakeman&Gottman 1986) と、男性10会話と女性10会話の計20会話において、ターン交替直時のあいづちやディスコースマーカーなどの出現率に男女差がないかどうかというデータを全体として見た場合の一貫性を確認するt検定である<sup>5</sup>。Cohen's Kappaは第三者となる評定者を立て一致率を測定する過程で、分類に対して単純に何パーセント一致しているかという確率(単純一致率)から偶然に一致する確率(偶然一致率)を差し引く方法であり、データ全体の8分の1から6分の1をサンプルとして取り出し、75% (k=0.75) 以上あれば問題ないとされることが多い。本研究における形式的分類の信頼性確保については、データ全体の20%に相当する4会話をランダムに選び評定者を立て一致率を測定した結果k=0.912となり、数値的に問題ないデータとなっている。そして、t検定は20会話全体から外国人日本語学習者のターン交替時の発話

の特徴を明らかにするという目的から、形式的分類によって分類されたデータに性別による偏りが見られた場合にデータ全体としての定量的分析や日本語母語話者データとの比較検証が難しくなるため行うこととした。この結果、本研究で調査対象となる外国人日本語学習者データにおける形式的分類の全ての項目の出現率に関して、男女間で有意な差は認められなかった。

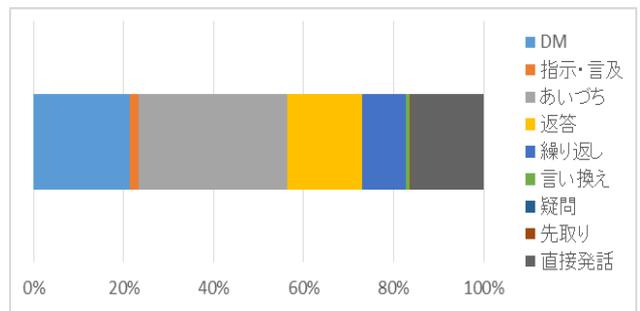
表4: ターン交替時の各出現頻度の平均 (形式的分類: 上位)

	DM	指示・言及	あいづち	返答	繰り返し	合計
平均(回)	13.50	1.35	20.90	10.55	6.20	
S.D	4.62	1.18	9.00	5.07	3.19	
	言い換え	疑問	先取り	直接発話		合計
平均(回)	0.50	0.10	0.10	10.30		
S.D	0.61	0.31	0.31	5.45		

表5: ターン交替時の各使用率の平均 (形式的分類: 上位)

	DM	指示・言及	あいづち	返答	繰り返し	合計
平均(%)	21.86	2.09	32.26	16.83	9.90	
S.D	8.16	1.86	9.81	7.89	5.10	
	言い換え	疑問	先取り	直接発話		合計
平均(%)	0.82	0.14	0.16	15.95		
S.D	0.99	0.43	0.48	7.75		

グラフ3: 外国人日本語学習者20名の談話の構成要素



さて、外国人日本語学習者のターン交替時の諸特徴について、形式的分類における定量的分析の観点から考察する。表4,5、及びグラフ3を見るとターン交替直後に外国人学習者は、「あいづち (32.26%)」や「ディスコースマーカー (21.86%)」から自身のターンを開始することが多

く、会話相手の発話をこれらで受けながら、会話を展開していることがわかる。さらに「直接発話」は日本語母語話者と変わらない比率となっていることも見逃せない点であり、「自分の言いたい命題的なことのみを伝える」ような会話を展開していないということであろう。

次に日本語母語話者の会話と比較すると外国人日本語学習者の会話では「ディスコースマーカ―」や「繰り返し」の出現率が下回る。まず「ディスコースマーカ―」について、質的に見ていくと、以下のようないくつかの特徴が観察できた。

(4) 形式的分類：上位分類 ディスコースマーカ―  
下位分類 つなぎ言葉

IN	好きなのはなんですか？。
INMA	<u>まあ</u> 、てんぷらが大好き。
IN	<笑いながら>てんぷらですか？。
INMA	はい。
IN	それはよく食べますか？。
INMA	<u>まあ</u> 、そとでてんぷら食べることあんまりないけど(うん)、自分で作る。

上記(4)のINMAの「まあ」に注目すると、定型化された発話として発せられており、会話中に9発話と多く出現した。このようないわゆる口癖のようにパターン化されたディスコースマーカ―は、本データでは特にその下位分類におけるつなぎ言葉やフィラーで多く出現し、「まあ」「いや」「んー」「あー」など話者によって異なる発話が、会話中に繰り返し現れた。こういった発話の機能的分類(機能や相対的効果)については別稿に譲るが、日本語学習者のこのような中間言語的とも言える発話は興味深いだけでなく、中には会話相手とのやりとりや文脈から見ると機能的に不適切と考えられるものもあった。

(5) 形式的分類：上位分類 ディスコースマーカ―  
下位分類 つなぎ言葉

IN	じゃー、レストランというよりは(はい)家で食べることが多いですか？、(いや)日本食は。
KRMA	<u>いや</u> 、今はですね(はい)、あの一朝は出来るだけ、家で食べて(はい)、お昼とかあの夜晩まで(はい)、学食で食べて、

(6) 形式的分類：上位分類 返答  
下位分類 なし

IN	うん(はい)、それじゃ(はい)日本で食べるのと味は変わらないですか？。
KRMA	<u>いや</u> 、やっぱりちょっと違うなって思います。
IN	うんうん(はい)。

次に上記は「いや」に関する形式的分類による違いと多様性に関する事例である。(5)の「いや」はINの「日本食を食べることは家が多いか」という質問に「今はできるだけ朝食は家で食べて」というように「いや」を会話を展開させるためのクッションのようにつなぎ言葉として使用しているのに対して、(6)はINの「味が変わらないか」という質問に「いや、ちょっと違う」というようにYes or Noの用法で「返答」している。つまり同じ表現形式である「いや」にも様々な用法が確認できる例である。このような場合、話者特有の話し方という捉え方、さらにその中でも円滑なコミュニケーションのために何がしかのディスコースマーカ―を使用していると考えられることができるだろう。

(7) 形式的分類：上位分類 ディスコースマーカ―  
下位分類 つなぎ言葉

IN	じゃですね(はい)、今、お刺身っていうのが出たんですけど(はい)、あの韓国ではもともと生の魚は食べるんですか？。
KRMA	<u>いや</u> 、そうですね、なぜかというのと、やっぱり三面?(はい)、あのもう土地の三面がもう日本と同じ海なんで、(あ)自然に昔から刺身という魚はそのまま昔から食べてきたと、はい、思ってるし、自然にさしみ?刺身(はい)、食べてきたじゃないかなと、僕は思ってるんですけども、(はい)はい。

しかしながら、日本語学習者のこのようなターン交替は必ずしも適切な表現形式としてのみ使用されている訳ではない。(7)のようにINの「韓国ではもともと生の魚は食べるか」という質問に対して「いや、そうですね」と「いや」のあとに「そうですね、なぜかという」というように同意と状況説明が続き、やや不自然で浮いている「いや」の用法も確認できた。

次に、「繰り返し」について質的に見てみる。日本語学習者に特徴的なターン交替時の様相として、確認のための

「繰り返し」があげられる。これは文字通り、会話相手が直前に言った言葉をそのまま繰り返す表現であるが、もちろん日本語学習者に限らず、日本語母語話者の会話においても普通に用いられるストラテジーの一つである。記述のグラフ1によると、「確認 (E)」は、日本語母語話者のターン交替時に現れる要素の中で13.15%の比率を占めている。一方、日本語学習者のデータ(グラフ3と表5)を見ると「確認」は9.9%となっており、日本語母語話者の比率を下回る。しかしながら、日本語学習者の用いる「確認」に特徴的なものとして、相手の発話内に出現した意味不明の言葉を繰り返すというストラテジーが存在する。もともと日本語母語話者に比べて語彙数が少ない日本語学習者は、会話相手の発話中の未知の語彙を口頭で繰り返し、その意味がよくわからないというサインを会話相手に送る。相手にその意図が伝われば、わかりやすい言葉で説明したり、あるいは言い換えるなどのフィードバックが得られる。すなわちこれは、日本語学習者に特徴的なストラテジーの一つとして捉えられるであろう。

以下に、具体的な発話例をあげる。(8)は、INMIが、INの発話中の「食習慣」という語彙の意味が分からず、それを一度繰り返した後、沈黙4秒をおいて「食習慣は何ですか?」と質問している。INはそれを受け、今度は「食習慣」という語彙を使わず、噛み砕いて説明している。

(8) 形式的分類：形式的分類：上位分類 繰り返し  
下位分類 なし

IN	じゃあですね、えーと、日本の食習慣の中で気になる点がありますか?
INMI	<u>食習慣</u> 沈黙4秒、食習慣は何ですか? <笑い>。
INMI	ええと、日本の、日本人の食べ物食べ方(あー)とか、はい(うん)、おかしいなあとか(うん)、やめてほしいなあということがありますか?

また(9)は、(8)とは異なる日本語学習者EGMAが、同様に「食習慣」という語彙が分からなかったため「しょくしゅう」と言っ、未知の語彙の一部のみを繰り返している。この場合、「あの」というフィラーを前置きしたため、発話の分類上は「A. ディスコースマーカ a-3. フィラー」となっているが、後に続く部分は明らかに「繰り返し」である。

(9) 形式的分類：上位分類 繰り返し  
下位分類 なし

IN	じゃーですね、えーと、日本の食習慣の中で気になる点がありますか?。
EGMA	あの、 <u>しょくしゅう</u> 。
IN	はい、食習慣。
EGMA	あー食習慣、あー。
IN	おかしいなあとやめてほしいなあということは、
EGMA	/少し間/食習慣(小声で独り言) あー別にいいですね、あー。

3つ目の具体例(10)は、THFIが「生」という言葉の意味がわからず繰り返しを行っている例である。THFIは最初、未知の語彙の冒頭の一部である「な」のみを繰り返し、次に、非言語行動の笑いを伴いながら「なま・・・」と会話相手に再度「分からない」というサインを送っている。

(10) 形式的分類：上位分類 繰り返し  
下位分類 なし

IN	じゃー、タイでは生の魚を食べる習慣はありますか?。
THFI	<u>な</u> 、ああ、[振り向いて笑う] あ、 <u>なま.....</u>
IN	生は知ってますか?。
THFI	知りません。

以上をまとめると、日本語学習者の「確認」の要素については、日本語母語話者と比較して全体の比率こそ少ないものの、未知の語彙に対する「説明要求」としての表現形式を有する発話が多く見られることを指摘した。

最後に(11)の例は、日本語母語話者の会話に比べて「返答」の出現率が高いことを示す例である。これにはいくつかの要因が関係している。まず接触場面でありインタビューというスタイルでもあるため、日本語母語話者であるインタビュアーが気を利かせて、或いは学習者をフォローするかたちで会話の主導権を握り、その分だけ質問が多くなっている可能性がある。しかしながら、このような傾向が本研究のみの性質と見なすのは尚早であり、今後はむしろ接触場面における会話の特徴という全体的な視点も入れて、様々なデータを検証していく必要がある。

(11) 形式的分類：上位分類 ディスコースマーカ―

下位分類 つなぎ言葉

IN	じゃ、シイさん、タイ、からいらしたんですね [↑]。
THFI	はい。
IN	はい、ええと、シイさんは日本料理を食べますか？
THFI	はい。食べます。[笑顔で]
IN	うん、好きな日本の食べ物がありますか？
THFI	はい、あります。うん、寿司です。
IN	あ、寿司が好きですか？
THFI	はい。

また、上記 (11) の会話を見ると学習者は「はい。」「はい、～(短い発話)。」のように短いターン交替を繰り返しており、日本語教育における初級的返答の名残とも見られる事例が確認できる。そして、これらは主に中級レベルの学習者に多く見られることから、上級レベルに向かうに従って、次第に自然なターン交替を身につけるのではないかと考えられる。

## 5 おわりに

本研究では、日本語母語話者間の会話のターン交替の特徴とターン交替直後の発話からその機能を探る磯野 (2009, 2010a,b, 2011a,b,c, 2013) の研究と比較検証するかたちで、外国人日本語学習者の会話の諸特徴に定量的な側面から迫り、定性的な特徴にも言及した。この結果、外国人日本語学習者はターン交替時に自身の発話を開始する際「命題的な自身の言いたいこと」のみを述べるのではなく、様々な形式の用法を駆使してコミュニケーションを円滑に進めようとしていることがわかった。日本語母語話者の会話との相違点や不自然な発話もあったものの、「確認」においては日本母語話者の会話にはあまり見られないが、日本語学習者の会話には多く見られ、かつ「説明要求」として自然なターン交替が成り立っているというような事例も確認できた。これは、日本語母語話者の会話のみがモデルとなる訳ではなく、日本語学習者の会話の語用論的と言える発話を分析することで「確かにこう言うこともできる」というような言語的多様性を明らかにする可能性と捉えることができるだろう。今後は、形式的分類による各項目が会話の中でどのような様々な機能を有しているの

かといった観点から分析を行い、母語場面や接触場面といった垣根を越えた総合的な見地から研究を行っていききたい。

## 注

1. 「形式的分類」及び「機能的分類」は、西原 (1991)、ザトラウスキー (1993)、堀口 (1997)、初鹿野 (1998)、大浜 (2006) 等の先行研究をまとめ、修正を加えたものである。磯野 (2010a, 2010b) に分類の詳細と例文が示されている。(韓国中央大学校日本研究所 <http://build.cau.ac.kr/cajjs/>・韓国日本学会 <http://www.kaja.or.kr/>)
2. 本研究で対象となったデータは「mic-J corpus-外国人へのインタビュー篇」「mic-J corpus-日本人へのインタビュー篇」として公開されている (<http://japanese.hum.tmu.ac.jp/mic-j/>)。詳しくは西郡・崔・磯野 (2010) を参照のこと。
3. 外国人日本語学習者の確保には困難な面もあったため、年齢については30代が2名、10代が2名含まれることになった(日本語母語話者については24名全員が20代)。
4. 本研究で扱ったデータは「リハーサル」という設定で、ある程度リラックスした状態で行った録画について、事後に被験者から承諾を得たものである。
5. 本研究に先駆けて行った日本語母語話者の研究においても同様の方法を採用している。
6. 確認のための「繰り返し」は、語彙のみを繰り返すことが多いため、日本語母語話者と同様に日本語学習者の発話内においても普通体になりやすい傾向が指摘されている(上仲1997)。また、自分の用いようとする語句が適切であるかどうかを確認するために語彙を示して適切な語彙を問うことを、佐藤 (2000) は「適語探索」と呼んでいる。日本語学習者の用いる一つの戦略としての確認のための「繰り返し」は、佐藤のいう適語探索に非常に近いものとして捉えられる。

## 参考文献

- Bakeman, R. & Gottman, J. M. (1986) *Observing interaction : an introduction to sequential analysis. Cambridge university Press.*
- 磯野英治 (2007) 「自然会話教材開発研究における素材データの収集について」『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3 自然会話教材開発研究部会』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室、pp.275-279.
- 磯野英治 (2009) 「日本語母語話者のターン交替における定量的分析とその語用論的特徴について—会話教育への示唆—」『2009年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国 日本学会、pp.122-126.
- 磯野英治 (2010a) 「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴について—インタビュー会話における定量的分析から—」『日本研究』Vol.28、韓国 中央大学校日本研究所、pp.137-158.
- 磯野英治 (2010b) 「日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について—機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆—」『日本学報』第84集、韓国日本学会、pp.227-240.
- 磯野英治 (2011a) 「日本語の会話におけるあいづち・ディスプレイ・スコアマーカ―の語用論的特徴と会話教育への示唆」『중앙대학교 국제학술심포지엄 한-중-일 3국의 이문화커뮤니케이션에 관한 보편성과 특수성 (Chung-Ang University International Symposium : The Universal and Distinctive Traits in Cross-Cultural Communicative Patterns of Three East Asian Countries: Korea, China and Japan)』、韓国 中央大学校、pp.23-33.
- 磯野英治 (2011b) 「日本語母語話者の会話における表現形式とその語用論的特徴について—ターン交替時の発話に着目した定量的分析—」『2011年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国 日本学会、pp.81-86.
- 磯野英治 (2011c) 「ターン交替時の発話に着目して話し言葉の機能・効果に迫る—日本語母語話者間の会話における定性的分析—」『The Third International Seminar on Japanese Linguistics and Japanese Language Education』、インドネシア教育大学、pp.1-13.
- 磯野英治 (2013) 「日本語会話における表現形式と機能の多様性について—ターン交替時の発話に着目した定量的分析—」『日本学報』第94集、韓国日本学会、pp.67-78.
- 上仲淳 (1997) 「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト—日本語母語話者との比較考察—」『日本語教育論集—小出詞子先生退職記念—』、凡人社、pp.149-165.
- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書、pp.17-36.
- 宇佐美まゆみ (2012) 「母語話者の日本語会話」『コミュニケーションのための日本語教育研究』、大学共同利用機関法人国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター、pp.13-20.
- 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替とあいづちに関する研究』、溪水社.
- 才田いづみ (2003) 「あいづち上手でよいコミュニケーション」『まなびの杜』23、東北大学、pp.94-97.
- 佐藤勢紀子 (2000) 『日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構』平成10年度～平成11年度 文部省 科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書、東北大学留学生センター.
- ザトラウスキー・ポリ― (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘ストラテジーの考察』、くろしお出版.
- 西郡仁朗 (2002) 「自然会話データ『偶然の初対面の会話』—その方法論について—」『人文学報』330号、東京都立大学人文学部、pp.1-18.
- 費報告書 (基盤研究C(2)) 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』 (研究代表者：宇佐美まゆみ).
- 西郡仁朗・崔文姫・磯野英治 (2010) 「mic-J コーパスの公開について—外国人へのインタビュー篇」「日本人へのインタビュー篇—」『人文学報』377号、首

都大学東京都市教養学部人文・社会系、pp.31-39.

西原鈴子 (1991) 「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』10月号 Vol.10、pp.10-18.

初鹿野阿れ (1998) 「発話ターン交代のテクニクー相手の発話中に自発的にターンを求める場合」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24、東京外国語大学留学生日本語教育センター、pp.147-162.

堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』、くろしお出版.